

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	The 29th European Educational Program in Epidemiology(EEPE)イタリア・フィレンツェの夏
別タイトル	The 29th European Educational Program in Epidemiology (EEPE)
作成者(著者)	中村, 孝裕
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.12
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(4). p.304 305.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r046
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD55400470

The 29th European Educational Program in Epidemiology (EEPE)

イタリア・フィレンツェの夏

中村 孝裕

東邦大学医学部社会医学講座衛生学分野



2016年6月20日～7月8日までイタリア・フィレンツェで行われた European Educational Program in Epidemiology (EEPE) に参加した。この EEPE は 1988 年から始まり今年で 29 回目を迎えたプログラムで、世界各国から集まった学生たちが共に疫学を学ぶ。国際疫学会 (International Epidemiological Association: IEA) を主体とし World Health Organization (WHO), Institute for Global Health, イタリア疫学会 (Italian Association of Epidemiology), 欧州の数多くの大学がスポンサーとなり 30 名の教授陣と 100 名の学生が寝食を共にして 3 週間朝から晩まで勉強する。学生とは言っても、私のような医師かつ大学院生から臨床医、国境なき医師団所属の疫学専門家、社会医学専門家まで幅広く学びに来ていた。

小児科医である私は子供たちを日々診察するなかで、彼らの病気の原因が“その子自身”に由来するというよりも、家庭・学校といった社会や気候変化などの環境が大きく影響すると考えるようになった。個人から集団へアプローチする際に必要になるのが衛生学・公衆衛生学で、特に疫学・統計学が重要となる。臨床医が社会医学を体系的に学ぶ機会は日本では少なく、なかでも疫学は公衆衛生学の核となる分野の 1 つであるにもかかわらず日本では十分に学ぶことが難しい。このような状況のなか、私は英国留学のご経験のある西脇教授のもとで疫学を専攻している。大学院で学んできたことを再び学び直す気持ちと言葉も文化も異なる国に身を置くことで自己を再認識し、また海外での立ち振る舞いや距離感について肌で感じるべくこの EEPE



30 名の教授陣と 100 名の生徒たち。
宿舎は広く、草木のきれいな大きな庭。



左上：Debbie Lawlor 教授のクラス写真。右上：Farewell party は甚兵衛姿で参加。
 左下：ライトアップされたドゥオーモ。右下：Certificate を片手に友人たちとの別れ

に参加することを決めた。望み通り(?)本プログラムのアジア圏、日本からの参加者は私1人であった。

3週間にわたるプログラムは、第1週は疫学や統計学の基礎と課題演習、第2週はグループワーク、第3週は各自が興味のあるテーマを選択し受講するコースワークで構成されていた。基礎的な内容から directed acyclic graph (DAG) や操作変数といった advanced な内容まで London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) の Neil Pearce 教授を中心に高名な教授陣による講義を受けることができた。統計では理論だけでなく統計ソフト Stata (StataCorp, College Station, Texas, USA) を用いた統計解析の演習も含まれていた。Stata は大学院での研究で使用しており私にとっては英語よりも advantage を感じながら取り組むことができた。グループワークでは積極的に発言することで周囲に対して自分の考えをアピールするように努めた。「がむしゃらな日本人」は時として笑いを誘いながらグループでの“和”を大切にしたい。最終日には、「Taka が発表した方がインパクトがある」と周囲からの後押しもあり presentation をさせていただいた。内容がよいか悪いかは別としてグループワークは3位の好成績であった。

私にとっても多くのヨーロッパ人にとっても英語は外国語であり、もちろん私は彼らほど英語が上手ではないが、

相手のことを理解しようとする気持ちの方が、言葉が通じないかもしれないという不安よりもはるかに強かった。さらに私はイタリア語の会話集を携えてイタリア語でも話しかけた。英語とイタリア語を混ぜながら学生や教授陣、カフェの店員に至るまで分け隔てなく積極的に話しかける「風変わりなアジア人」は、結果として“いつでも・どこでも・だれとでも”話を始めることができ、どこに座っても「Buongiorno, Taka」と声をかけてもらうことができた。週末になると友人たちとこぞって食事へ出かけるのだが、観光客でにぎわう華やかな街の中で、知り合った友人たちと“ばったり”出会うことも多く、遠いと感じていたフィレンツェをぐっと自分の身近な街に感じるようになった。

最近ではコミュニケーションの形も大きく変化し、帰国後も SNS など写真や動画などを共有するだけでなく、リアルタイムで互いの近況を報告することができる。この研修で作ることができた多くの仲間とのこの親交を今後も大切に、国際学会やシンポジウムなどで再び「Taka」と呼ばれる日が来ることを楽しみに待っている。最後に今回の EEPE プログラムに快く送り出してくださった西脇教授と日本で帰りを待っていてくれた家族に心から感謝申し上げたい。